

十二イマーム・シーア廟参詣の理論的側面

吉田京子

〈論文要旨〉イスラーム世界全般に見られる（聖者）廟参詣は、これまで専ら文化人類学的研究の対象とされてきた。それらは、廟参詣を「公的」イスラームとは異なるものとして捉え、一般信者による「民衆的」行為として語ることが多い。しかしながら、イスラームには廟参詣を教義的イスラームと深く関わるものとして捉える事例も存在している。その一例として本論が採りあげるのが、十二イマーム・シーア派のイマーム廟参詣理論である。同派のイマーム廟参詣は、単なる墓参りではなく、「原初的過去からの伝統の継承」であり、「イマーム性の原理の確認行為」であり、そこから得られる報酬は、シーア派信者としての義務を果たした結果得られる正当な権利と理解されている。同派のイマーム廟参詣は、民衆による自発的実践行為であると同時に、「イマーム」に関わる点において、知識人側からも綿密な理論化を受けたものであり、正式なイスラームの信仰行為として展開されているものである。

〈キーワード〉廟参詣、イマーム廟、十二イマーム・シーア派、ナジャフ、カルバラ

はじめに

十二イマーム・シーア派では、歴代イマーム、およびその親族の遺体や遺物を祀った廟への参詣 ziyārah⁽¹⁾が盛んである。廟参詣は、そこに葬られている故人を追悼し、敬意を表す以外にも様々な目的をもって行われる。同派のイマーム廟の一つであるイランのマシャド巡礼⁽²⁾は、神と預言者の一族を称えることから始められる。続いて八代イ

マームに隣接して埋葬されているアッバース朝五代カリフ、ハールーン・ラシード Hārūn al-Rashīd (d. 809)⁽³⁾ の呪詛、八代イマームを含めたイマーム全員への敬愛と忠誠の表明があり、その後、参詣者自身と家族のための個人的な祈禱と祈願 *al-du'a' wa-al-taḥarru'* が行われる。イマーム廟内では、参詣者が、自らの解放や救い、赦しを求めて泣く姿や、イマームの棺を囲む格子にすがりそこに接吻する行為等がしばしば目撃される。⁽⁴⁾

イマーム廟参詣を含め、イスラーム世界ではいわゆる廟参詣が盛んに行われている。⁽⁵⁾ クルアーンから導き出されるイスラーム的世界観では、人間を平等とし、たとえ預言者ムハンマドに対してであつても、偶像崇拜につながるような必要以上の特別視を許さない。そのため、死者の墓を華美に装飾し、何らかの救済目的のためにそこを訪れるような行為としての廟参詣は、常に「イスラーム」という枠の中での位置付けが問われる特殊なテーマであつた。廟参詣は、これまで専らフィールド調査を中心に民衆の具体的な実践面からアプローチする、文化人類学的研究で扱われてきた。それらの研究は当然のことながら、廟参詣をイスラームの教義や理論に終始する「知識人的」イスラームや、体制側からの押し付けである「公的」イスラームとは異なる次元でとらえることが多い。そして、廟参詣を一般信者の生活により密接した「民衆的」行為として語る。そのため、廟参詣と習俗的（非イスラーム的）伝統との類似性や近似性のみが強調されやすく、廟参詣とイスラームの教義との関連性や、イスラーム信仰内部での位置付けに関しては明確な回答を出せないままに留まつている。⁽⁶⁾

このような廟参詣をめぐる研究の偏りを修正する目的で、本論は十二イマーム・シーア派の廟参詣がもつ理論的側面に焦点をあてる。同派のイマーム廟参詣は、前述のような民衆の個人的願望を満たそうとする自発的行為であると同時に、同派の信仰の軸である「イマーム」に関わるものであることから、「知識人」による理論付けがなさ

れた正式な信仰行為としても展開されている。イマーム廟参詣に関する最初期の文献の読解、分析を通じ、同派のイマーム廟参詣の理論的側面に焦点をあてることで、「民衆的」実践行為としての廟参詣が、「知識人的」イスラームとも密接に関わりつつ存在していることを示そうとするものである。

廟参詣に対する諸見解

廟参詣はイスラーム世界全般に広くみられる慣習であるにも関わらず、それに対する知識人たちの見解は多様である。一極には、廟参詣を偶像崇拜に抵触する行為として徹底的に排除しようとする立場が存在している。西暦十四世紀シリアのハンバリー派法学者、イブン・タイミーヤ *Taqī al-Dīn Aḥmad b. Taymīyah* (d. 1328) による参詣批判がその例といえる。イブン・タイミーヤは、神と信者の間に執り成しや仲介者を介在させることを、神の唯一性の侵害とみなし、偶像崇拜につながる危険な行為と考えた。そのため、預言者や聖者のもつ執り成しの力や恩寵にすぎたる行為としての廟参詣を、シャリーアの逸脱、クルアーンやスンナに基づかない後代の付加物(ビドア)として退けたのである。⁽⁷⁾ イブン・タイミーヤに代表される極端な廟参詣批判はあくまでも少数派の見解であり、一般大衆による参詣行為を消滅させるには至っていない。しかし、その考え方はイスラームの「刷新」と「修正」を掲げた近代以降のイスラーム主義者らの思想にも多大な影響を与えたといわれている。

イブン・タイミーヤやワッハーブ主義者など、極端に廟参詣を排除する立場とは異なり、預言者ムハンマド廟を中心とする民衆の廟参詣に一定の理解を示す立場も存在している。イブン・タイミーヤの時代では、イブン・タイミーヤの意見を否定した、ダマスカスのシャーフイイー法学者、スブキー *Taqī al-Dīn al-Subkī* (d. 1355) がその

例として挙げられる。⁽⁸⁾彼は預言者ムハンマドの伝承を根拠として、メッカ大巡礼に伴うメデイナの預言者廟への参詣を正当化している。彼の主張によれば、墓参行為の目的は、第一に、「死」と「来世」を確認することであり、第二に、死者のために祈願することであり、第三に、故聖者の傍らににいることにより恩恵にあやかろうとすることであり、第四に、死者に敬意を表することである。そして、これら全ての目的は合法なもので、預言者の時代からの慣行に基づいていると結論付けられている。このような見解は現代にいたるまで、スンナ派四法学派における多数派の意見といえるものである。⁽⁹⁾

スブキーからさらに一歩進み、より積極的に廟参詣を奨励する主張を展開しているのが、十二イマーム・シーア派である。同派の信仰では、預言者の唯一正統な後継者であるイマームに対して敬愛と忠誠を示すことが義務とされている。そのため、イマーム廟参詣は、シーア派信仰の核に関わる重要な実践とみなされることになる。同派の神学的、法学的思想が体系的に整備された西暦十一世紀までには、多数のイマーム廟参詣に関する著作や記述が執筆され、イマーム廟参詣の理論的側面が整えられた。

一次資料

同派の廟参詣に関する著作や主張の大半は、廟参詣の是非をめぐる神学的論争や法学的議論を意図したものではない。多くは、イマーム廟参詣を行う同派の信者向けに執筆されたものである。具体的には、参詣地の解説や廟参詣の手順、指導、廟参詣によって信者に与えられる報酬や功德の紹介、参詣の際の特別な祈禱文 ziyarah⁽¹⁰⁾などが記録されている。従って、これらの文献はスンナ派における大巡礼の書と同じ範疇に入るものである。

具体的な資料は、以下のものを利用した。

- 1 イブン・クラーワイヒ *Abū al-Qāsim, Ja'far b. Qulawayh al-Qummi* (d. 367-8/977-8)
『完璧なズィヤーラ ⁽¹¹⁾ *Kāmil al-ziyārāt*』
- 2 イブン・バーバワイヒ *Abū Ja'far Muḥammad b. Bābawayh al-Qummi* (d. 381/991)
『リダーに関する主要伝承集 ⁽¹²⁾ *ʿUyūn akhbār al-Ridā*』
- 3 同著者『講義録 ⁽¹³⁾ *Amālī Shaykh Ṣādūq*』
『諸行為の報酬と諸行為の罰 ⁽¹⁴⁾ *Thawāb al-a'māl wa-'iqāb al-a'māl*』
- 4 シャイフ・ムフイード *Muḥammad b. Nu'mān al-Shaykh al-Mufid* (d. 413/1022)
『参詣地の書 ⁽¹⁵⁾ *Kitāb al-mazar*』
- 5 マジュリスィー *Muḥammad Bāqir Majlisī* (d. 1110/1699)
『諸光の大海 ⁽¹⁶⁾ *Bihār al-anwār*』
- 6 十二イマーム・シーア派四大法学伝承集 ⁽¹⁷⁾

これらの文献は、十二代イマームのガイバ以降に執筆されたものである。当時は同派でイマーム廟参詣が盛んになった時代でもある。文献の分類は右記のものから順に、参詣についての単独書、イマームの伝承集、講義録、法学書、参詣についての単独書、伝承集、法学伝承集である。執筆者は、当時の同派を代表する知的権威でありイスラーム法専門家たちである。

イマーム廟参詣に関する特徴的主張 その一 参詣地の普遍的価値

イマーム廟参詣に関する主張では、三代イマーム、フサインの殉教と彼の殉教地カルバラに関する主張が圧倒的多数を占めている。⁽¹⁸⁾ フサイン廟参詣は同派では義務行為に数えられ、最優先されるべき巡礼と捉えられている。⁽¹⁹⁾ フサイン廟以外の参詣については、カルバラ巡礼を倣って提示され、フサイン廟参詣に等価視、あるいは集約されることが多い。⁽²⁰⁾

フサイン廟参詣に続いて言及が多いのは、初代イマーム、アリー廟参詣である。⁽²¹⁾ 現ナジャフを含むクーフアは、メッカ、メディナに次ぐ、清浄な「神の土地」とみなされている。⁽²²⁾

同派の廟参詣は、それがイスラームの枠内における実践である限りにおいて、メッカ、メディナ巡礼に基礎づけられていることは明らかである。⁽²³⁾ しかし、イマーム廟中心の同派の参詣の場合、カルバラとクーフアが圧倒的な重要性をもっており、両参詣の主張を軸に同派の参詣は理論化されているといえる。

参詣に関する議論では、いくつかの特徴的な主張がみられる。第一に、イマーム廟のある土地は、イマームの殉教と埋葬に限定されないより普遍的な価値を持つという主張である。言い換えれば、イマーム廟が建立された土地は、イマーム埋葬以前から独自の普遍的価値と聖性を有していたという主張である。

カルバラは、カアバ創造の数万年前から既に、恩寵の宿る聖域と決められていた土地といわれる。そこは、預言者や使徒以外住むことのない天国の最上の住処のように創られたとされる。⁽²⁴⁾ カルバラの聖性は、フサインの血が流され、それをカルバラの土が吸って初めて顕現するが、イマームやムハンマドをはじめ、ムハンマド以前の

預言者や天使たちは、フサイン殉教以前からそのことを知っていた。⁽²⁵⁾ そのため、彼らはカルバラの悲劇以前からフサインの殉教を嘆き、フサインの墓（となる地）を訪れ、彼のために祈っていたと主張される。⁽²⁶⁾ さらに、フサイン殉教の地には、四千から七万の天使が派遣され、復活の日まで墓守としてそこに留まる。他にも多数の天使が昼夜問わず天上界からフサイン廟へ下ってくる。シャアバーン月半ばには、神の許可を得て、ヌーフ、イブラーヒーム、ムーサー、イーサー、ムハンマドを含めた数万の預言者が、天上からフサイン廟を訪れるのである。⁽²⁷⁾ カルバラーは、天使の常駐する場であり、過去の預言者たちが訪れる場として普遍的価値を持つ。⁽²⁸⁾

クーフアがメッカ、メディナに次ぐ神の土地とみなされる所以は、アリーの埋葬のためだけではない。アリー廟の土地は、アダムとヌーフの墓でもあり、（現ナジャフ近郊の）サフラ・モスクの地はイブラーヒームの家であった場所であり、イドリースの家であった場所であり、預言者たちの肉体が創られた土のあった場所なのである。⁽²⁹⁾ ムハンマドも礼拝のために天使ジブラーイルに引き連れられ、クーフアのモスクを訪れたことがあると伝えられる。クーフア訪問は、「先人たる父祖たちを訪れることであり、預言者の封印であるムハンマドを訪れることであり、（預言者の）相続人の長であるアリーを訪れる」行為となる。⁽³⁰⁾ クーフアが清浄な神の土地であるのは、「（ムハンマド以前の）預言者たちとその相続人たちの墓場であり、預言者たちが礼拝したモスクのある場所であり、神の公正が顕現する場である」ためなのである。⁽³¹⁾

カルバラやクーフアの例にみられるように、イマーム廟のある場所は過去の預言者たちと関連付けられている。そのような聖なる土地でイマームは殉教したのであり、その結果、天上界から多数の訪問者が下る。その土地の普遍的価値はさらに高まるのである。そこを訪れた者には、天の扉が開かれ、天に続くはしがかけられ、そこ

での一回の礼拝は千回分の価値があるとみなされる。そこは天国の楽園の一部なのである。

イマーム廟参詣も「神、天使、過去の預言者たち、ムハンマド、アリー、その他のイマームたち」が行ってきたことの継承であり、普遍的伝統と理解されている。⁽³²⁾

イマーム廟参詣に関する特徴的主張 その二 イマーム廟参詣の包括性

第二点目は、イマーム廟参詣は、そこに埋葬されているイマーム一人のみを対象として行われるものではないと考えられている点である。これは、前述した参詣地の普遍的価値の主張につながる主張である。以下の七代イマームの伝承に表れているように、イマーム廟参詣はイマーム全体を対象とした、より包括的なものとみなされている。

我々の最初の者（イマーム）を訪れた者は、我々の最後の者をも訪れたことになる。我々の最後の者を訪れた者は、我々の最初の者を訪れたことになる。我々の最初の者の仲間となった者は、我々の最後の者の仲間となったことになる。我々の最後の者の仲間となった者は、我々の最初の者の仲間となったのである。我々のいづれかによつて願いがかなった者は、我々全員によつてそれがかなったのである。アブドル・ラフマーンよ、我々を愛せ。我々に関わることを愛せ。我々のために愛せ。我々の仲間となれ。我々を仲間とする者の仲間となれ。我々と敵対する者の敵となれ。我々に対する反抗は、我々の祖父である神の使徒に対する反抗である。神の使徒に反抗する者は、神に反抗する者である。⁽³³⁾

この考え方は、イマームの墓前での祈禱にも明確に示されている。アリー廟参詣者は、第一に、神の使徒に、続

いてアリーに対して平安を祈る。その後、フアーティマ、ハサン、フサインと残りのイマームたち、過去の預言者と使徒たち、天使たち、自らを含む正しき神の下僕たちのそれぞれに対して平安を祈る。⁽³⁴⁾ フサイン廟でも同様である。平安の希求は、ムハンマド、アリー、ハサンとフサイン、その他のイマームたち、フアーティマのそれぞれに対して順に行われる。その後、フサインの墓を守る天使たちにも平安が祈られる。⁽³⁵⁾ また、フサインに対する呼びかけも、「アーダムの後継者、ヌーフの後継者、イブラーヒームの後継者、ムーサーの後継者、イーサーの後継者、ムハンマドの後継者、ムハンマドの相続人（アリー）の後継者、ハサンの後継者」のように行われ、フサインの「神の証し」としての系譜が明確になるよう配慮されている。⁽³⁶⁾

一人のイマームに対する信仰は、十二人のイマーム全員に対する信仰を包括している。また、イマームは、イマーム↓預言者↓神へとつながる正統な「神の証し」の系譜の中に位置付けられる存在と捉えられている。同じ「神の証し」への参詣という意味で、イマーム廟参詣はメディナへの預言者廟参詣と等しい（あるいはそれ以上の）価値のあるものとみなされることになる。そして、それらの「神の証し」への参詣は、最終的に神の玉座への神の訪問へとつながられて考えられている。⁽³⁷⁾

イマーム廟参詣に関する特徴的主張 その三 「嘆き」の奨励と呪詛

第三の特徴は、イマーム廟参詣における「嘆き」の正当化と、イマームの敵の呪詛の主張である。フサイン廟参詣者は、「悲しみに打ちひしがれ、髪を振り乱し、渇きに耐えながら」カルバラに向かうことを要求される。⁽³⁸⁾ フサインの墓参を最初に始め、同派の参詣者の模範とされている四代イマーム、アリー・ザイヌルアービディーン

は、アードム、ヤアクーブ、ユースフ、ファアティマに続く、「五人目の泣く者」と言われている⁽³⁹⁾。

イマームの死に対する「嘆き」は、イマーム廟参詣時に限定されるものではなく、信者は常にイマームの死に対し涙することが要求される。食事の度に涙した四代イマームや、水を飲む度に泣いた六代イマームを倣い、イマームの死を連想させるものや行為に触れた際に涙することは、十二イマーム・シーア派では善行として奨励されているのである。「フサイン・イブン・アリーについて詠じ、五十名泣かせた者には天国が約束される。フサインについての詩を詠み、三十名泣かせた者にも天国が約束される。フサインについて詠じ、二十名泣かせた者にも天国が約束される。フサインについて詠じ、十名泣かせた者にも天国が約束される。フサインについて詠じ、一人泣かせた者にも天国が約束される。フサインについて詠じ、自ら泣く者にも天国が約束される。フサインについて詠じ、泣き続ける者にも天国が約束される。」⁽⁴⁰⁾といわれるように、イマームの非業な死を想起させる語りや朗唱などによって他者を泣かせる行為さえも善行とみなされる。

イマームの死に対する「嘆き」の中でも、廟参詣における「嘆き」には特別の機能が付されている。フサインの死に対しては、「神の証し」をはじめとする天地の万物が涙したと考えられているが、廟参詣において重要となるのは、天使の嘆きである。イマーム廟には墓守の天使たちが常駐し、常に涙を流している。廟参詣は、この天使たちの眼前でイマームのために涙することを意味する。天使たちは、参詣者の嘆く姿を目撃した結果、「彼が過ちを犯しても彼のために善行を倍にしてください。そしてその善行は、彼に天国が確実となるまで倍化し続ける。それから天使たちは彼を囲み、彼を清める。するとムハンマドが彼らに叫ぶ。『神のもとに來た者たちよ、天国で私と寄り添うことを喜べ』。次に信徒たちの長アリーが彼らに叫ぶ。『私は現世と来世におけるお前たちの願いに責任を

持ち、お前たちを試練から解き放つ』。そして（天使たちは）彼が同じ住人となるまで彼を左右から取り囲む。⁽⁴¹⁾」

イマーム廟参詣者は、墓守の天使たちと「嘆き」を共有することにより、彼らの仲間 al-shi'ah となる。その結果、復活の日にはこの天使たちに付き添われ、彼らが証人となり、審判を受けることができる。そして真の「天国」を獲得することができるのである。⁽⁴²⁾ スンナ派では忌避される墓場での「嘆き」も、十二イマーム・シーア派では、不当に殺害され殉教したイマームの死を嘆き悲しむ者たちの仲間となるための条件、仲間となる意思表明と考えられ、奨励される。

さらに、イマームの死を嘆くことと表裏一体の行為として、廟参詣ではイマームの殺害者に対する呪詛が要求される。

イマームの墓前での祈禱は、「神の証し」と天使たちへの挨拶に始まり、故人のイマーム性が完璧であったことの証言に続き、イマームの敵への呪詛が行われる。イマームの敵として呪詛されるのは、「イマームと敵対し、イマーム性を否定し、共謀してイマームに反抗し、結果的にイマームを殺害し、イマームを避け、見捨てたウンマ」⁽⁴³⁾である。彼らの呪詛に続き、これらの敵からの離別 *bara'* を証言する。

イマーム廟参詣は、涙することで亡きイマームと、イマームを包括する「神の証し」全体に対する忠誠を表現し、天使たちの仲間となる行為であると同時に、イマームの敵対者との決別の宣言の場である。

イマーム廟参詣の目的

文化人類学的研究では、廟参詣は何らかの祈願の成就と現実的利益の獲得と結び付けられて捉えられる場合が多

い。イマーム廟参詣に関する文献にも様々な現世利益について記録されており、それらが参詣者の実質的な参詣目的となることが容易に想像される。カルバラの土に付与された薬効は、イマーム廟参詣に伴う現実的利益の代表的な例といえる。殉教したイマームの血を吸ったカルバラの土には、特別の病氣治癒力があるとみなされ、あらゆる病に効く万能薬と考えられている。⁽⁴⁴⁾その他にもイマーム廟参詣には、子授け、なくし物の発見、奴隷身分からの解放、病氣治癒、除災、安全、金銭的開運、親子再会、延命など様々な現世利益が伴う。⁽⁴⁵⁾しかし、廟参詣理論では、このような現世利益は、参詣者に与えられる報酬の一部にすぎないとされる。むしろ、参詣の本来の目的はそれ以外の来世的報酬の獲得にあると主張される場合が多い。⁽⁴⁶⁾

同派の主張によると、イマームは、仲間との間に墓参の契約を取り交わしたといわれている。⁽⁴⁷⁾イマーム廟参詣がシーア派信者の義務とみなされるのは、このイマームとの契約を前提としているためである。信者がその約束を果たすと、イマームは公正な存在である限り、必ずその行為に報いると考えられている。参詣者がイマームを通じて様々な現世的、来世的報酬を求めることは、義務を遂行した結果要求しうる当然の権利と受け止められているのである。⁽⁴⁸⁾

参詣遂行により期待される来世的報酬の最大のもは、イマームをはじめとする、預言者や天使たちによる復活の日における「執り成し shafā'ah」である。廟参詣者は、イマームのもとを訪れ、彼らの死を悼み、敵を呪詛することでシーア派信者としての立場を明確にする。その報酬として、参詣者は復活の日、三箇所（帳簿が開かれる時、橋の上、秤にかけられる時）で彼らからの執り成しを期待することができ、審判の際の恐怖が軽減される。⁽⁴⁹⁾参詣書には、参詣者に与えられる「執り成し」が、具体的なイマームの言葉として明示されている。

アブー・アブドッラー、フサイン・イブン・アリーの墓を訪れた者たちを御赦し下さい。彼らは我々を称えた
 いがために財産を使い、身体を動かしました。あなたのもとにいる時、我々と結ばれていたと願い、あなた
 の預言者ムハンマドに対し喜びを感じ、我々の命にも応え、我々の敵に対して怒りました。彼らはそのことに
 よってあなたの満足を得たいのです。彼らを満足させて下さい。昼夜、彼らをお守り下さい。彼らの故郷の
 者、子孫を報いて下さい。彼らは最も良い者を後に残しています。彼らを見守り下さい。彼らをあらゆる頑迷
 な抑圧者、生まれつきの弱虫、強者らの悪から遠ざけて下さい。悪魔による人とジンからの悪から遠ざけて
 下さい。そして、彼らが故郷を離れた地（参詣地）であなたに望むところの最上のものをお与え下さい。そし
 て、彼らの息子たちと彼ら自身、故郷の者、親戚にも良い影響をお与え下さい。神よ、我々の敵は彼らが（参
 詣に）旅立つことを非難していましたが、そのようなことは、彼らが旅立ち、我々のもとに来る障害とはなり
 ませんでした。日に焼けたこの人々の顔に慈悲を垂れたまえ。アブー・アブドッラー、フサインの墓に向けら
 れるこの人々の頬に慈悲を垂れたまえ。我々を哀れみ、涙を流すこの人々の目に慈悲を垂れたまえ。我々のた
 めに心配し、痛んだこの者たちの心に慈悲を垂れたまえ。この者たちの我々に対する願いに慈悲を垂れたま
 え。神よ、渇きの日（復活の日）、泉においてあなたが彼らの渇きを癒すまで、私はこの者たちの魂と肉体の
 上にあなたの守護を求めます⁽⁵⁰⁾。

来世的報酬の二つ目は、罪の浄化である。天国の一部とみなされる聖地を訪れ、そこで預言者や天使たちの仲間
 となったことで、全ての罪から清められた状態（天国の住人としての資質）が得られると考えられるのである。廟
 参詣からは罪に汚れていない「生まれた時と同じ状態⁽⁵¹⁾」で帰還することができ。

信者を参詣に誘う直接の契機となるこのような報酬が謳われる一方で、廟参詣には、十二イマーム・シーア派の派としての存続やそのあり方を模索する「知識人」の立場を反映した信仰上の機能も付与されている。

第一に、廟参詣は「神への近づき」のために行われると主張される。これは、イマーム廟参詣をメッカ巡礼と同じく、イマームを通じた神との対峙の場と捉える発想である。

参詣者は故郷を出発する際、「神の使徒の息子（イマーム）のもとへ」と言う前に「神のもとへ」と意思表示する。⁽⁵²⁾ 到着の際は、次のように宣言する。

神よ、私を清めたまえ。私の心を清めたまえ。私の心を開きたまえ。私の口にあなたを称える言葉、あなたへの愛、あなたの賞賛の言葉をのぼらせたまえ。力はあなたにおいてしかありません。私は知っています。私の信仰は、あなたの命令に従うものであり、あなたの被造物全体に対する証言の言葉である預言者の言葉に準拠するものであると。神よ、私に執り成しと光を下さい。あなたは全て可能なお方。⁽⁵³⁾

廟に入ると、先ず神の唯一性を証言し、棺に近づき、次のように言う。

神よ、私は彼ら（イマーム）への愛情をもってあなたに近づきます。彼らの仲間を我が仲間とし、彼らの敵を我が敵とします。彼らによって私に現世と来世での糧を与えて下さい。彼らによって現世と来世の悪を、そして復活の日の恐怖を私から遠ざけて下さい。⁽⁵⁴⁾

同様な文句は参詣における祈禱中多数存在する。それらは、イマーム廟において参詣者が対話する第一の相手だが、イマームではなく神であることを示している。そして、イマーム廟における祈禱や礼拝は、メッカ、メディナでの礼拝とともに、イスラームの礼拝を完成させるものと説明されている。イマーム廟参詣を神に近づく手段と捉

えることにより、他派からのイマーム（偶像）崇拝という非難を免れ、イマーム廟参詣をメッカへの大巡礼やメデアナの預言者廟参詣と同じ範疇のものとして正当化することが可能となる。

第二に、イマーム廟参詣を、純粹にイマームに対する忠誠と敬愛を表現する場として捉え、自らのシーア派信仰を確認する場とみなす主張がある。参詣時の祈禱には次のような信仰告白の言葉が多数みられる。

あなた方（イマーム）が正しいとするものを正しいとし、あなた方が間違いとするものを間違いとし、あなた方に従います。あなた方の権利を認めます。あなた方の美德を確信し、あなた方の知識に依拠し、あなた方の庇護のもとに留まり、あなた方を認め、あなた方のもとにあるものを信じ、あなた方の帰還はあると考え、あなた方の命（マフディー）を待望し、あなた方の国を待ちわび、あなた方の主張を支持し、あなた方の命に従い行動し、あなた方のもとに庇護を求め、あなた方を訪れ、あなた方に助けを求め、あなた方の傍におり、あなた方を通じて、偉大にして尊高なる神に執り成しを求め、あなた方を通して神に近づき、自分のあらゆる望みや要求や願いよりもあなた方を優先します。あなた方の秘密にしたもの、公にしたもの、顕現されたお方、お隠れのお方、最初のお方から最後のお方までを信じ、全てをあなた方に委ねます。あなた方と共にムスリムとなります。私の心はあなた方を信じ、私はあなた方を支持する意見を持ちます。あなた方を助ける準備は整っております。至高なる神があなた方によってその信仰を蘇らせ、神の日にあなた方を取り戻し、公正さ故にあなた方を勝利させ、地上をあなた方に支配させる時まで。私はあなた方とともにおります。けしてあなた方の敵とともにいることはありません。私はあなた方を信じております。最初のお方が信じたことに基づき、私も最後のお方を信じます。……神よ、生きている限り、私にイマームたちへの忠誠と愛と信仰を確実なものに

して下さい。私をあなた方に服従させて下さい。あなた方の執り成しを与えてください。神へと召喚される際、私をあなた方に付き従う最上の仲間としてください。あなた方の跡をたどり、あなた方の道を進み、あなた方の導きに従う者として下さい。そして、あなた方の仲間として集められる者にして下さい。あなた方の帰還において帰ってくる者にして下さい。あなた方の国で支配される者にして下さい。あなた方の繁栄を享受する者にして下さい。あなた方の時にいられるようにして下さい。明日、あなた方を見まえる喜びを持つ者として下さい。⁽⁵⁵⁾

十二代イマームの大ガイバ（西暦九四一年）以降、同派の信者は、信仰の支柱であるイマームに直接的、感覚的に依拠することができなくなった。イマーム廟は、イマームの実体を感じ覚的に確認できる唯一の場であり、自らの信条を直接語りかけることのできる最高の信仰告白の場として捉えられている。そこは、イマームに神への執り成しを願う場であると同時に、神へイマームの仲間となることを願う場ともされている。

おわりに

同派の廟参詣理論には、上記のような特徴的主張と参詣目的が示されている。これらは、廟参詣を行う一般信者の行為を教義面から正当化、補完するものと捉えられる。

シーア派思想には、信仰信条に関することがらの起源を、ムハンマドを含めたそれ以前の預言者たちに求める傾向がある。これは、イマームの思想や行動に正統性を与えようとする試みであり、イマームを過去の預言者を含めたムハンマドと同じ「神の証し」という範疇で捉える、同派のイマーム論を前提とした発想である。この手法が、

十二イマーム・シーア廟参詣の理論的側面

参詣地を普遍的な聖地と捉える主張にも用いられている。

また、イマーム廟参詣を包括的なものと捉える主張は、同派の信仰の形である「イマーム一人に対する信仰は、イマーム全員に対する信仰を包括する。イマームに対する信仰は預言者に対する信仰を包括する。預言者に対する信仰は神への信仰を包括する」という考え方を、廟参詣に忠実に反映させたものといえる。さらに、廟参詣における嘆きと呪詛は、同派の「(イマームへの) 忠誠と(反イマーム派からの) 離別」の信条の具体的実践に他ならない。

具体的な現世利益追求のための参詣、直接のイマーム崇拜という批判を避けるために、廟参詣の目的に関してもより高尚な神学的目的が設定され、イマーム廟参詣が神へのものであり、同派の信仰信条に忠実なものであることが示されている。

同派の信者にとりイマームは、「神の証し」として神に最も近い場所を占める存在であり、⁽⁵⁶⁾ 信者にとっては、集い来る門であり、神と神の水場へ至るための最も確実な道である。信者は、このイマームに対する忠誠と服従を通じてのみイスラームの信仰を完成させることができ、神からの恩寵に満たされる。⁽⁵⁷⁾ 逆に、イマームへ依拠することなくして信仰が完成することはなく、そのようなイスラームは不完全なものと捉えられている。⁽⁵⁸⁾ 従って、完全な信仰を実現するには、イマームの生死や顕現、お隠れ等の存在状態とは無関係に、常にイマームに対して忠誠を誓い、彼らに依拠することが必要と考えられるのである。この意味で、イマーム(あるいはイマームの居る場所)は、イマームの死亡後も信者の行くべき最も高貴なる訪問先、目的地となる。イマーム廟参詣は、信者に対し常に要求される「イマームに対する依拠」を果たす行為のひとつとして、同派の信仰上必要不可欠なものである。

イマームへの忠誠心を直接の接触や交流によって示すことが不可能となったガイバ以後の時代においても、イマーム性の信仰は修正されていない。そのため、イマーム廟は、現実空間におけるイマームとの唯一の対峙の場として、重要な役割を担っているといえる。現実生活における行動規範、法規定などに関しては、イマームの代理人としての法学者に依拠する態勢が整えられるが、法学者が負い切れない役割（信仰の吐露、懺悔の受け入れ等）を担うのがイマーム廟参詣であるといえる。そのような場所を求めるのは信者の自然な行動であり、そのような行動を「知識者」側が正当化、理論化し、信仰の体系に取り込むことで同派独自の廟参詣は成立している。

注

- (1) シーア派のズィヤーラ（訪問）には、イマーム廟参詣以外にもイマーム・ザーデといわれるイマーム近親者、縁者の墓参や、一般信者の墓参も含まれる。また、より広義には、死者以外の人物のもとを来訪することも含まれている。本論ではズィヤーラの意味をイマーム廟参詣に限定している。
- (2) マシャドは現在のイラン・イスラーム共和国の首都テヘランの東方約八五〇キロに位置するホラーサーン地方の都市。西暦八一八年に死亡したとされる同派の八代イマーム、リダー Abū al-Hasan, 'Alī al-Riḍā の埋葬地として、西暦九世紀末には同派の重要な参詣地となっている。サファヴィー朝時代以降は、イラクにあるイマーム廟への参詣がオスマン朝の影響下で困難となったため、マシャド巡礼が積極的に奨励されることとなり、現在もイラン人の中でのマシャドの人気は不動である。
- (3) ハールーン・ラシードはアッバース朝七代カリフ、マアムーン al-Ma'mūn bi-Allāh (d. 833) の父である。同派では、マアムーンが、八代イマームを後継者に任命した後、心変わりし、彼を殺害したと考える。八代イマームの殺害に関する同派の伝承については、Ibn Bābawayh, *ʿUyūn akhbār al-Riḍā* (Bayrūt, Mu'assasat al-a'lami lil-maṭbū'āt, vol. 2, 1984), pp. 271-279 等参照。

- (4) Zahra Kamalkhani, *Women's Islam* (London, Kegan Paul International, 1998), pp. 102-112.
- (5) 廟参詣は、イスラーム世界全般にみられる伝統でありシーア派に限定されたものではない。スンナ派における聖者廟参詣や、

メッカ大巡礼において伝統的に行われてきたムハンマドの廟参詣も形式上は同じ参詣にあたる。

- (6) 廟参詣にまつわる文化人類学的研究の概説に関しては、鷹木恵子『北アフリカのイスラーム聖者信仰』刀水書房、二〇〇〇年、五―三二頁参照。

- (7) イブン・タイミーヤによる廟参詣批判については、Christopher S. Taylor, *In the vicinity of the righteous* (Leiden, Brill, 1999), pp. 168-194.

- (8) この立場の見解については、*Ibid.*, pp. 195-218.

- (9) タイラーは、墓参行為そのものの正当性は認められていたものの、墓参に際しての過剰な行為や感情表現(墓石への接吻など)に対する危惧が法学者や知識人の間にあったと指摘している。*Ibid.*, p. 211.

- (10) 「イマーム廟参詣の際の特別な祈りの言葉」を示す語は、参詣を示す *ziyārah* と同じである。

- (11) Ibn Qūlawayh, *Kāmil al-ziyārāt* (al-Najaf, al-Maṭba'ah al-Mubārakah al-Murtadawiyah, 1356 A.H.). 十二イマームのガイバ(260/874)以後、最も早く編纂された参詣に関する書。当時の一般的手法であった伝承集形式で、預言者と諸イマームの発言という形式で参詣に関する伝承が収録されたものである。

- (12) イブン・バーバワイヒは、クラワイヒと同時代の代表的伝承学者。参詣に関する伝承を数多く伝えている。特に八代イマーム、リーダーの伝記的伝承集である同書では、リーダー(レザー)廟(現在のイランのマシヤド)への廟参詣について数多くの伝承を引用し、そこへのズィヤラを積極的に奨励したことで知られている。

- (13) *idem*, *Amālī Shuykhī Ṣadūq* (Tih-rān, Intishārāt kitābchī, 1370 A.H.). 同書はイブン・バーバワイヒがコムにおいて行った講義を日付ごとの章立てで記録したものである。同書はフサインの殉教についての経緯を詳細に述べ追悼行事を奨励した最初期の文書として有名である。

- (14) Ibn Bābawayh, *Thuwāb al-a'māl wa-'iqāb al-a'māl* (Qum, Manshūrāt al-Ridā, 1364 A.H.).

- (15) al-Shaykh al-Mufid, *Kitāb al-mazār* (Bayrūt, Dār al-kitāb al-islāmī, n.d.).

- (16) Muḥammad Bāqir Majlisī, *Biḥār al-anwār* (Bayrūt, Dār iḥyā' al-turāth al-'arabī, vol. 97, 1992).

- (17) 同派の法学伝承集では、イマーム廟参詣に関する項目がハッジについての章内に組み込まれている。このことから、当時既に派内でイマーム廟参詣が信仰行為として定着していたことがうかがえる。後代の廟参詣に関する著作は、廟参詣における作法、儀礼に関するものであれ、廟参詣の正当性を議論するものであれ、ズィヤラと称される祈禱文句についてであれ、論拠、典拠としてこれら最初期の伝承に依拠する場合が多い。*al-Kulaynī, Furu' al-kāfī* (Bayrūt, Dār al-adwā, vol. 4, n.d.). Ibn

Bābawayh, *Man lā yuhdunh al-faqih* (Tih-rān, Dār al-kutub al-islāmiyah, 1390 A.H.).

- (18) 代表的な参詣書であるイブン・クーラワイヒの『完璧なバイヤーラ』では、三代イマーム、フサインに関する記述が一〇八項中七三項を占めている。

- (19) Ibn Bābawayh, *ʿUyūn akhbār al-Riḍā*, vol. 2, p. 292. Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, pp. 37-40 他多数。フサイン廟参詣は、実行すれば延命が約束され、参詣を怠ると寿命が縮まるとさえ言われる。 *Ibid.*, pp. 42-43.

- (20) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, p. 300. Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, p. 164. al-Majlisī, *op. cit.*, p. 116. 尚、マシヤド（イラン）の八代イマーム、リダー廟（レザー廟）に関しても個別の伝承や記述が多いが、これは八代イマームの廟参詣を意識的に奨励する体制側の思惑が絡んだ結果といえる。フワイフ朝フズイル、サーヒブ・イブン・アッバード Ismāʿīl b. al-ʿAbbās b. ʿAbbād (d. 383/993) の依頼により編纂されたリダーに関する伝記的伝承集や、サファヴィー朝期の有力法学者、ムハンマド・バーキル・マジュリスィーによる主張などにその傾向が顕著である。しかし、八代イマームの廟参詣に関しても、その内容は三代イマーム廟参詣からの踏襲であることに相違ない。

- (21) アリーの場合、廟のあるナジャフを含め、実際に彼が指導の拠点としていたクーファを参詣地とするのが通常である。

- (22) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, pp. 29-30. Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, pp. 18-19.

- (23) 廟参詣の文献には必ず預言者廟参詣についての項目が設けられている。

- (24) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, p. 268. Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, p. 34. Ibn Bābawayh, *Thawāb al-aʿmāl*, p. 94.

- (25) *idem*, *Aʿmāl*, pp. 136-137.

- (26) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, pp. 111-120. 同様に、八代イマームのトゥースにおける殉教も、預言者ムハンマドまで溯る約束事として「神の証」の間では周知のことであったといわれている。Ibn Bābawayh, *op. cit.*, p. 611.

- (27) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, p. 179. Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, p. 50.

- (28) 八代イマーム、リダーの殉教地であるトゥースも、天たちの頻繁の訪問により天国の一部とみなされている。Ibn Bābawayh, *ʿUyūn akhbār al-Riḍā*, vol. 2, p. 286. *idem*, *Thawāb al-aʿmāl*, pp. 87-88. al-Majlisī, *op. cit.*, p. 116.

- (29) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, pp. 29-30. Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, p. 25.

- (30) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, p. 39. Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, p. 33.

- (31) al-Majlisī, *op. cit.*, p. 18.

- (32) Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, p. 98.

- (33) al-Majlisī, *op. cit.*, p. 88.
- (34) Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, p. 75.
- (35) *Ibid.*, p. 94.
- (36) *Ibid.*, p. 169.
- (37) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, p. 174. Ibn Bābawayh, *Amālī*, p. 63, 120. Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, p. 59 世°
- (38) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, p. 131. Ibn Bābawayh, *Thawāb al-a'māl*, pp. 88-89. Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, p. 89.
- (39) へーデンの樂園を思ふ泣き° ヤムナーフはコースフを思ふ泣き° コースフはヤムナーフを思ふ泣き° フアーティマは神の使徒を思ふ泣き° Ibn Bābawayh, *op. cit.*, pp. 140-141.
- (40) *Ibid.*, pp. 141-142.
- (41) *Ibid.*, pp. 91-92.
- (42) *Ibid.*, p. 142. Ibn Bābawayh, *ʿUyūn akhbār al-Riḍā*, vol. 2, p. 48.
- (43) Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, p. 77.
- (44) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, pp. 275-279. Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, pp. 125-128.
- (45) *Ibid.*, pp. 311-320.
- (46) Ibn Bābawayh, *op. cit.*, pp. 294-298.
- (47) Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, p. 159. al-Majlisī, *op. cit.*, p. 116.
- (48) Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, p. 101.
- (49) Ibn Qūlawayh, *op. cit.*, p. 304. Ibn Bābawayh, *ʿUyūn akhbār al-Riḍā*, vol. 2, p. 285. Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, p. 168.
- (50) *Ibid.*, p. 95. al-Majlisī, *op. cit.*, p. 87.
- (51) Ibn Bābawayh, *op. cit.*, p. 291.
- (52) *Ibid.*, p. 300.
- (53) *Ibid.*, p. 300.
- (54) *Ibid.*, pp. 301-302.
- (55) *Ibid.*, pp. 307-308.
- (56) Shaykh al-Mufīd, *op. cit.*, p. 80.

- (57) *Ibid.*, p. 85.
- (58) Ibn Qulawayh, *op. cit.*, p. 193. Shaykh al-Mufid, *op. cit.*, pp. 63-64.
- (59) イマーム廟参詣と同様、同派の民衆的実践行為であるイマーム、フサイン追悼行事も、民衆の自発的行為としての側面が知識人側による正当化の理論によって補完されている事例として挙げられる。また、スンナ派の事例としては預言者聖誕祭などが同じようなものとして検討可能であると思われる。